

カワウの保護管理に係る研修会

研修資料

この研修資料は、下記の研修のために使用されたものです。

そのため、情報が古い場合があります。

また、Web での掲載のために一部修正や削除、構成の変更をしているものがあります。

令和6年度カワウの保護管理に係る研修会

対 象： 都道府県及び市町村の鳥獣・水産行政担当者

開 催 日： 2024年6月27日(木)、7月4日(木)

場 所： オンライン開催

講 師 と 科 目： 基礎編講義

環境省鳥獣保護管理室(鳥獣保護管理の法制度等)

水産庁栽培養殖課(カワウ被害対策の進め方と水産庁事業について)

加藤ななえ(カワウの生態とモニタリング調査)

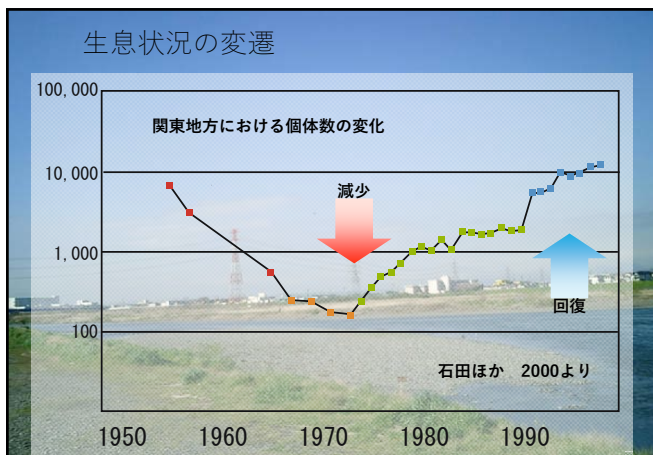
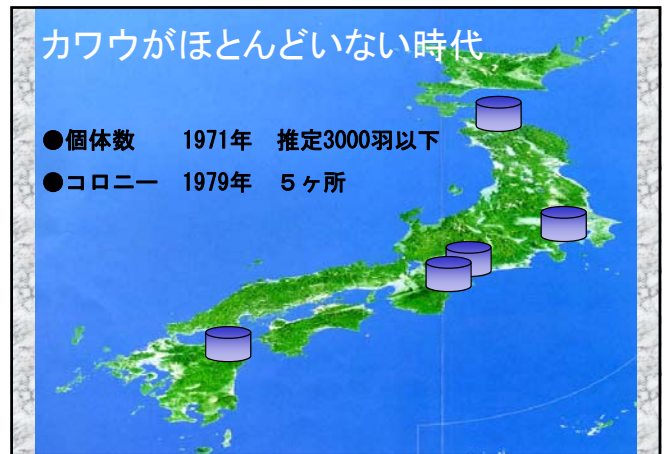
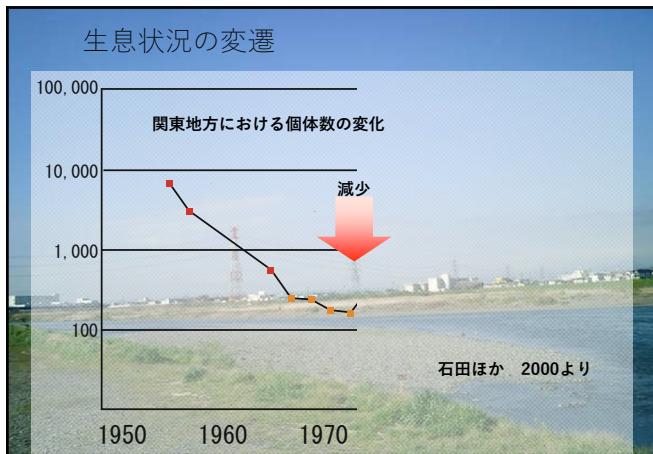
高木憲太郎(カワウの生息状況と季節移動)

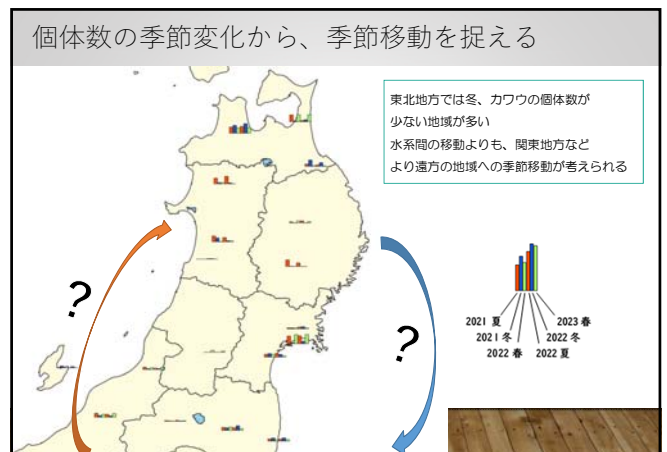
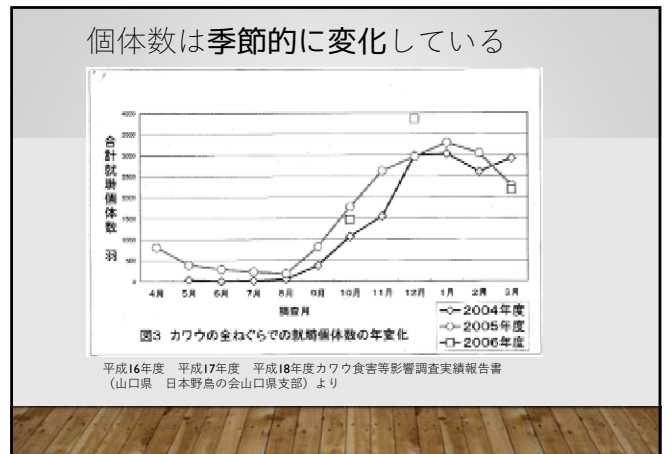
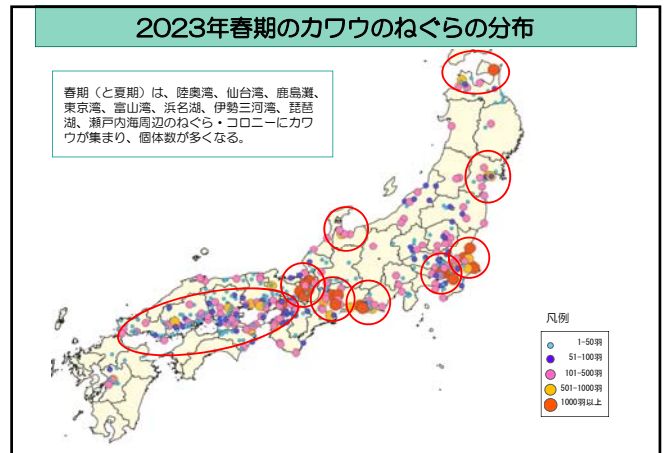
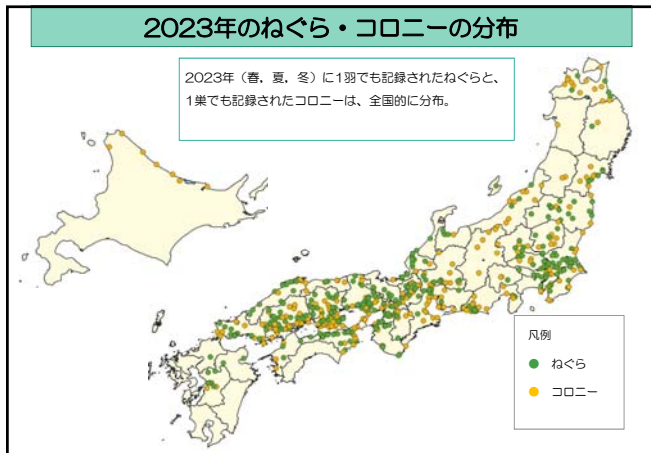
応用編講義

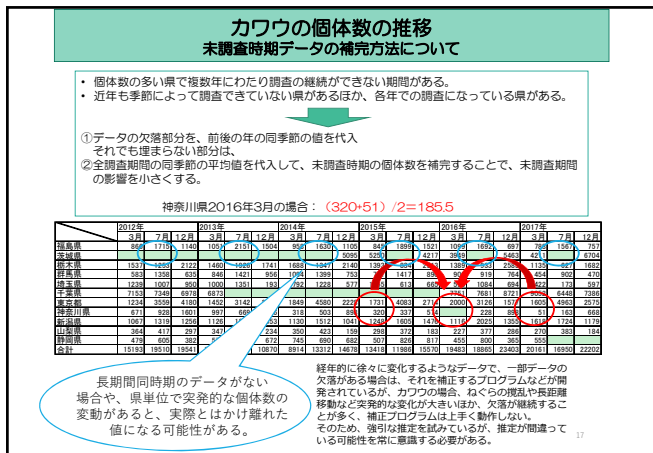
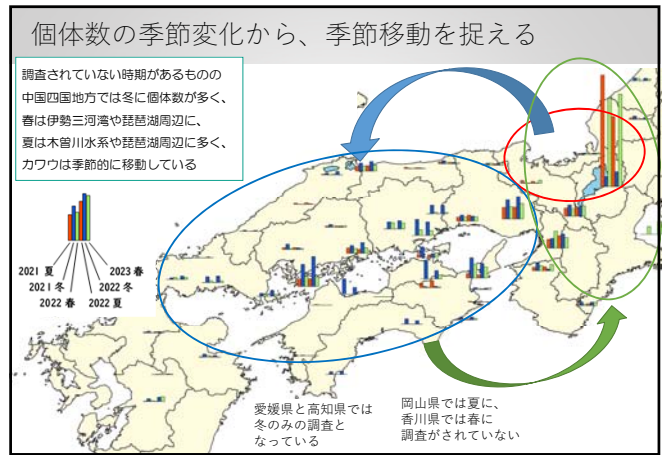
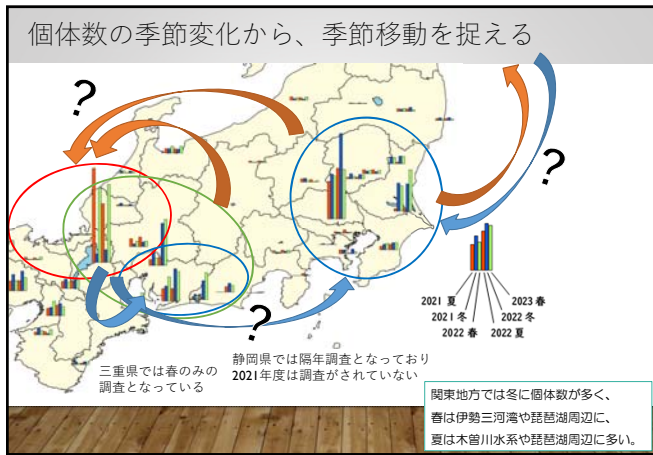
山本麻希(鵜的フェーズと管理計画の作成)

坪井潤一(内水面における被害防除対策の実際)

須藤明子(個体数調整をすべき状況の判断と実際)

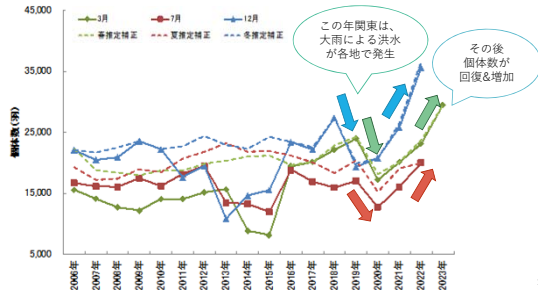






関東地方における個体数の推移

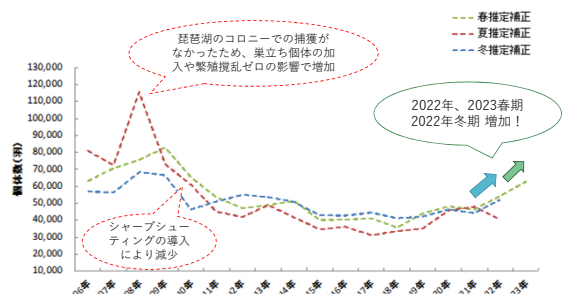
- 調査未実施の都県の欠損を補正した推定値では、2017年まではどの季節も年変動は大きくなかったが、それ以降年変動が大きくなった。
- 冬期は、2018年に増加し、2019年は急減した。
- 続く2020年の春期と夏期も前年より急減した。
- 2021年、2022年はどの季節も急増し、2023年春期も前年より増加した。



19

中部近畿地方における個体数の推移

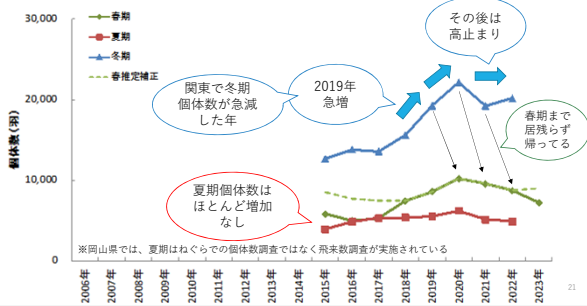
- 多くの県が継続して調査できているので、集計値と補正を加えた推定値に大きな差がない。
- 推定値からは、2020年夏期に個体数が増加したが、2021年はそれ程増えていない。
- 2022年春期と冬期、2023年春期は個体数が増加したが、2022年夏期は減少した。



20

中国地方の個体数の推移

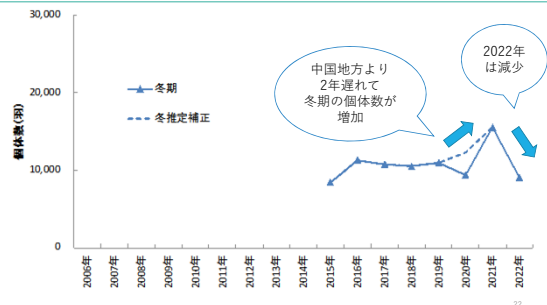
- 2023年夏時点では、2023年春のデータは一部揃っていない。
- 他の季節に比べ冬期の個体数が多い、中部近畿地方などに移出して繁殖している個体が多いと推測される。
- 冬期は、2018年から個体数が増加しはじめ、その後高止まりしている状態。



21

四国地方の個体数の推移

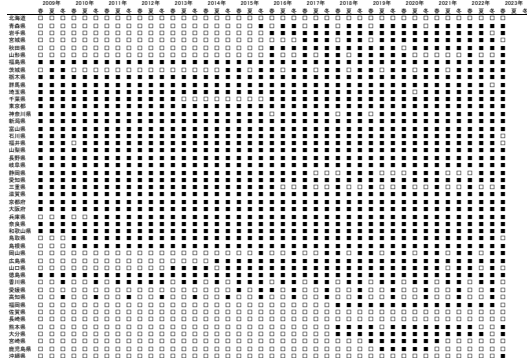
- 冬期の調査は全県で実施されるようになった。
- 春期と夏期は調査が実施されていない県が多い。
- 冬期個体数は中国地方より2年ほど遅れて増加したが、2022年には減少した。
- 香川県と愛媛県で大きなぐらゐの個体数が減少していた。



22

全国のカワウの個体数の推定

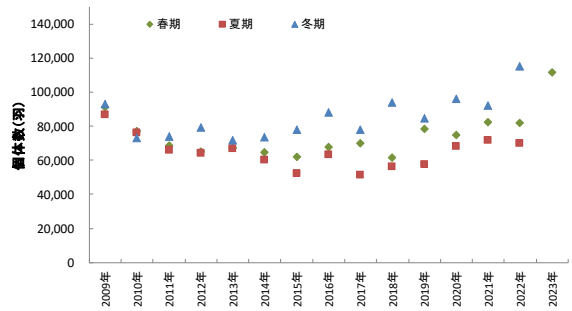
- 個体数のデータが得られている都道府県 (2015年以前については調査データを得ていないだけの都道府県がある)



23

全国の個体数の推定

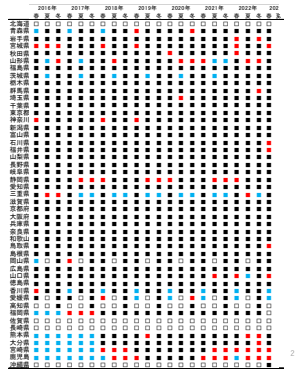
- 個体数のデータが得られている都道府県のデータを足した値をグラフにしたもので、グラフが示しているのは、少なくともこの個体数は全国にいたという下限の値。
- 年により調査している都道府県が異なるため、経年変化は読み取るものではない。
- 春期の個体数は、2009年は9万羽、2018年は6万羽、2023年は11万羽以上生息していた。



全国の個体数の推定

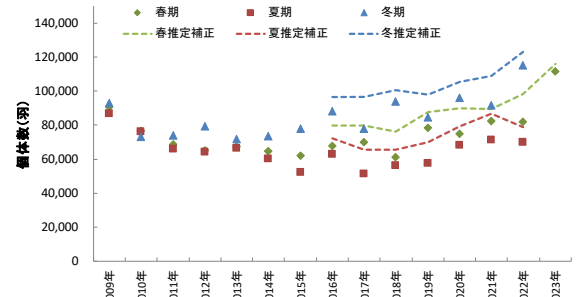
- 推定に使用したデータと補正方法

- データの欠落部分に、前後の年の同季節の値を代入
- 全調査期間の同季節の平均値を代入して、未調査時期の個体数を補完
- 同季節に調査された年がないため、推定においては0羽として扱った

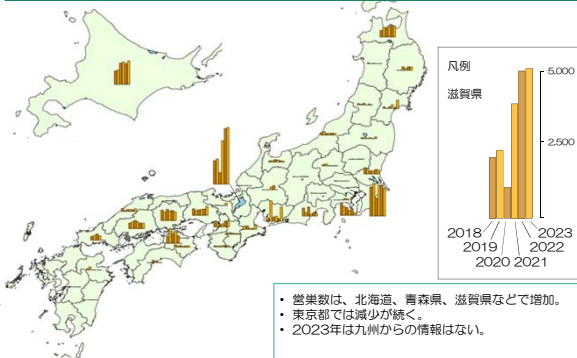


全国の個体数の推定

- 未調査月の値を前後の年の同じ季節の個体数等で保管する方法で求めた東北、関東、中部近畿、中国四国、九州沖縄の推定値に、北海道の営巣数の2倍（1巣に雌雄の親鳥のみがいると仮定）の値を加えて2016年以後の個体数の推移をグラフ化した。



2018-2023年春期のカワウの都道府県別営巣数

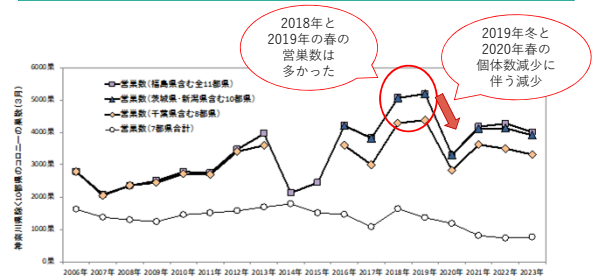


- 営巣数は、北海道、青森県、滋賀県などで増加。
- 東京都では減少が続く。
- 2023年は九州からの情報はない。

北海道の2020年と2021年、愛知県の2019年は営巣数の多い
コロニーで調査が実施されたが他の年は実施されなかった。
香川県は冬期調査時の営巣数を使用した。

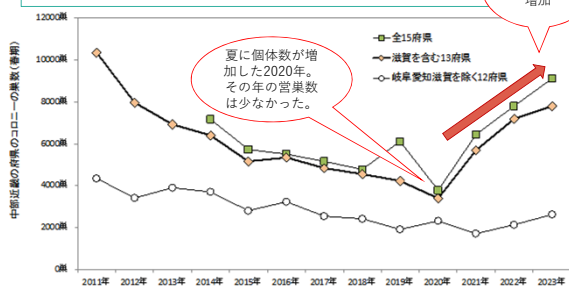
関東地方における営巣数（春期）の推移

- 2018年と2019年の春は個体数の増加に伴い、営巣数も多かった。
- 2020年は、2019年冬の個体数減少の影響で2020年春の個体数が少なかったため、営巣数も少なかった。
- 2021年以降は大きな変化はない。



中部近畿地方における営巣数（春期）の推移

- 個体数は2020年の夏に増加したが、その年の春の営巣数は少なかった。
- 2021年から2023年にかけて増加が続いている。



中国四国地方における営巣数（春期）の推移

- 2015年以降、営巣数は増加傾向にあったが、2019年頃に頭打ちになった。
- 2022年の営巣数は、調査中・集計中のため見た目上減少している。

